

## 佐伯千秋伝記研究のための覚書

―「少女小説」戦後第一世代作家の様相を明らかにするために―

富 中 佑 輔

はじめに

本稿は、一九五〇年代から七〇年代まで『女学生の友』などで活躍した少女小説作家・佐伯千秋（さえき・ちあき）に関する伝記研究の一端を報告するものである。これまで佐伯千秋は一九六〇年代ジュニア小説の作家という固定観念があまりにも強く、佐伯の作品や佐伯についての言説をいくつか引用することに終始して、昭和後期に同業者であった富島健夫とともに思春期の少女の欲望を作品に描いた単純な大衆作家として評価されてきた。一方で、佐伯自身の言説や伝記的事項に関する総体が網羅的に論じられたことは現在に至るまで皆無であるばかりか、作品の検討・評価においても少女小説のスタンダードに近いものがその系譜のなかで紹介されているだけで、佐伯千秋という作家の全体像は未だ明らかにされていない。

もちろん、全集も刊行されることなく最早忘れ去られた大衆作家の伝記研究に、いまさら何の意味があるのかと言われれば、返す言葉はない。ただし、一時圧倒的な支持を得ていたにもかかわらず、今や忘れ去られたことの理由を明らかにすることは、文学というメディアに潜在する問題を明らかにする手がかりを見いだせるはずだ。本稿では、そのために

以下の二点を明らかにしたい。ひとつは現在の文学研究で扱われる「少女小説」ジャンルが、作家以外の言説によって編成された傾向が強いという点であり、もうひとつは、佐伯千秋という作家の伝記研究によって「少女小説」が編成された物であるが故に見えなくなっている事実を、明らかにすることができるといふ点である。前者に関しては第一章で述べ、後者に関しては本稿全体で論じる。

## 一 「少女小説」というジャンル文学の特殊性

ミシェル・フーコーは言説を「自身がそれについて語る諸対象をシステマティックに形成する実践<sup>〔1〕</sup>」として捉えた。同じく文学史も、唯一の真理を求めて語られる対象ではなく、諸言説により「語られること」で形成されたシステム<sup>〔2〕</sup>体系と捉えられる。「純文学」の歴史としての文学史を形成する諸言説の中で、重要な位置を占め続けてきたのが作家たち自身による「純文学」としての意味づけを自動的に目論む言説である。例えば作家や文芸評論家によって組織される日本文藝家協会や日本ペンクラブは、年刊のアンソロジーや出版目録を編纂し続けている。また三島由紀夫賞や野間文芸賞など故人の功労と現存作家の活動を顕彰することを意図した賞も多く存在し、作家たち自身の手によって優秀な作家・作品が顕彰されるという、自閉的、自己完結的現象が定着している。作家たちはこうした実践の中で、何を「純文学」の正統として評価するか、何を周縁に位置づけるかという選択を行うのだ。これらの選択は、言語表現として残され、文学史が構築される上で決して無視することができない言説となる。随時の「純文学」を後世に示す際、これら表現に残された選択が、中心的な役割を果たすことになる。この状況は基本的に、「純文学」以外の小説史においても同様である。「純文学」以外とは、ミステリ（探偵小説、推理小説）やSF（サイエンス・フィクション、スペキュレティヴ・フィクション）といった「ジャンル文学」と称されてきた小説群のことだ。ミステリは大正期から現在まで、そのジャンルの作家によって幾度

も論じられ、論争され、定義し直されてきた。職能団体としては一九四七年に江戸川乱歩によって設立された日本推理作家協会（設立当時は探偵作家クラブ）と二〇〇〇年に設立された本格ミステリ作家クラブが存在し、それぞれ日本推理作家協会賞・本格ミステリ大賞という年間最優秀作品を選出する功労賞を設けている。SFも同様に、『S・Fマガジン』創刊時の編集長・福島正実をはじめとして、星新一・小松左京・筒井康隆などの戦後SF作家はSF評論家でもあり、職能集団としては日本SF作家クラブが存在する。功労賞としては作家・評論家により選考される日本SF大賞を維持している。ミステリもSFも、「純文学」に対する明確なカウンター・カルチャーであったがゆえに、特に戦後、自らをジャンル内部からの言説により強力に意味づけてきた経緯がある。だが「少女小説」というと、出版社や時代を越えた職能団体が存在したことはなかったし、功労賞の性質を有する賞も存在してこなかった。これは市場原理とジャーナリズムの力学によって流行した各時期の「少女小説」を、作家たち自身がジャンル全体という広い視野を持って意味づけようとする実践が、他の「ジャンル文学」に比べほとんど生まれなかったことを意味する。嵯峨景子『コバルト文庫で辿る少女小説変遷史』（彩流社、二〇一六年）の初版本帯には、少女小説作家として活躍した新井素子が推薦文として、「当事者で、でも、部外者の私には、これ、とても面白かった」（傍点引用者）と寄せているが、これが何よりも少女小説ジャンルの特殊性を示しているといえるだろう。「少女小説研究」における「少女小説」とは、出版社や研究者など、作家以外の人間による様々な言説から形成されたという傾向が非常に強いのである。作家たち自身によって形成された文学史が存在しないために、各時期の様相が雑多な一次情報の状態でしか残されていないという「少女小説」について久米依子は、「少女小説がまさにポピュラー・カルチャー——スチュアート・ホールが示唆したように、支配的文化との絶え間ないせめぎ合いの中で、定義し特定化するのが難しい文化であること——の証<sup>2</sup>」と捉えている。ただしそれは、言い換えれば、現在ようやく形成されつつある「少女小説」が、ジャンルを編成する者によって語るときで生成変化する伝承物語Ⅱフォークロアの性質を、他のジャンル文学と比べても強く有してしまっているということである。故に本稿では、こうした「少女小説」の性質に留意しつつ、

佐伯千秋という作家、またそれに伴う一九五〇年代から六〇年代前半までの「少女小説」ジャンルの様相を明らかにすることを目的とする。

## 二 佐伯千秋の伝記的研究

### 1 言語装置としての「佐伯千秋」

佐伯千秋は一九五〇年代から七〇年代にかけて、少女／ジュニア小説の作家として活躍した。佐伯に関する研究論文は現在まで皆無だが、戦後期から一九七〇年代の少女小説ジャンルについて記述する際には必ずといっていいほど言及される。二〇一五年に出版された『少女小説事典』では、戦後期の少女小説の書き手に関して「吉屋信子・北条誠・横山美智子・三木澄子・城夏子・船山馨・佐伯千秋等が中心的書き手であった」とされているが、これらの中で戦後になってから創作し始めたのは佐伯だけである。佐伯の著作はすべて絶版となっているが、名前だけは現在も関係書に登場する。例えば瀬戸内寂聴責任編集の『the 寂聴』第九号（角川書店、二〇一〇）では、「一九五〇年代後半～七十年代にかけて／（ジュニア小説）が盛んになる。富島健夫、吉田とし、佐伯千秋などが活躍」（六〇頁）と書かれ、また同時期の少女小説は「アメリカ文化の影響のもと、少女たちの性と愛をテーマとする作品が、富島健夫・吉田とし・佐伯千秋・三木澄子といった書き手たちによって次々と発表された」（九〇頁）と解説されている。また川西政明『道づれの旅の記憶 吉村昭・津村節子伝』（岩波書店、二〇一四）でも、「作家をめざしていた津村節子は、昭和二八年、同じ志をもつ吉村昭と結婚した。そして節子は、本名北原節子の名前で、三谷晴美（瀬戸内寂聴）、佐伯千秋、三木澄子らとともに、少女小説の世界で活躍を始めた」（カバー折り返し）と書かれている。荒川佳洋『ジュニア』と「官能」の巨匠 富島健夫伝』（河出書房新社、二〇一七）においては、「当時の真摯なジュニア小説家」として富島健夫以外に、「佐伯千秋、吉田とし、三木澄子」の名を挙げる。

さらに佐伯が一九五〇年代初頭に会員であった文芸同人誌『文藝首都』を主宰した保高德蔵の妻・保高みさ子による『果実の森 小説「文藝首都」』（立風書房、一九七二）では、戦後期の『文藝首都』の様子を語る際、佐伯について佐藤愛子とともに取り上げられている。だがここで重要なのは、佐伯の作品は『文藝首都』に一度も掲載されたことがなかったという点である。これは佐伯が富島健夫とともに「ジュニア小説」作家として紹介されていた時期とちょうど重なっており、読者の間の知名度に応じて紹介される当時の会員を選択した結果であろう。これは逆に、作品が推薦作として誌面に掲載されていても名前が登場していない書き手が存在することからも窺うことができる。例えば同書の中では、佐藤愛子とともに『文藝首都』一九五〇年一二月号に作品が掲載され、以後同人として作品や文芸時評を寄せた「水島璃ぼう」（後のSF作家今日泊亜蘭<sup>3</sup>）については全く触れられていない。今日泊の知名度は、当時も現在も決して高くはないのだ<sup>4</sup>。

つまりこれらの佐伯の登場する諸言説をみるだけでも、「佐伯千秋」という固有名詞が、一九五〇年代から七〇年代にかけての少女小説ジャンルの空気感を連想させる言語装置として、ジュニア小説ブーム当時から現在に至るまで、機能し続けてきたことが確認できるのである。しかし、少なくとも一九八〇年代以降、佐伯を論じた論文どころか文章自体ほとんど存在せず、ここに少女小説研究のひとつの空白が指摘できる。

## 2 自伝を中心に

ここからは佐伯自身の執筆した「自伝 私の歩いてきた道<sup>5</sup>」（一九六八年）を参照しつつ、それに関連する諸資料を適宜比較しながら、佐伯の生涯を概観する。以下、特に注記のない場合、自伝からの引用である。

佐伯千秋は、一九二五（大正一四）年二月六日、広島県広島市西大工町（現在の広島市中央区内）に生まれた。本名は千賀子という。彼女の生家は「カネトモ商店」という果実問屋であった。佐伯によると、「裏口は西大工町にあり、表口

は榎町にあり、全国各地から貨車や荷船でついで来たものが、店にはいつも山積みになっていた。毎朝、夜明けと同時に広島市の西半分の果実小売商人たちが買い付けにやってくる。友と染めぬいた厚子を着こんだ荒っぽい男たちの声が、早朝の店に満ちていたという。子どものころの生活について佐伯は、「金銭的には不自由なく育てられたけれど、朝の早い商家だから、父母は夕食のあとはレコードをきくでもなし、本を読むでもなし、すぐ寝てしまう。私は、何かものたりなかった」と振り返る。そんな彼女は四人姉弟（姉二人と兄がいる）の末っ子であり、「兄とは年が近かったけれど、長姉とは十歳も年が離れていたからあまりかまってはもらえず、（中略）小学三、四年ころから、私は読書に熱中する子になった」と語る。一九三一（昭和六）年に私立光道小学校に通うようになると、彼女は本格的に読書に夢中になっていく。ただし佐伯は、当時の読書に関して「ひとり本屋にいらしても、自分で選べる本は『小学×年生』という雑誌くらいである。でも私は、そんな雑誌は嫌いだった」と振り返り、「少女むけの小説を書きだしてから、ふしぎに思うのだけれど、私は、小学生、女学生時代を通して、そのころには『少女の友』『少女クラブ』などという少女むけ雑誌もあったのに、それを愛読した記憶がない」と書いている。その代わりには彼女が読みだしたのは、「姉たちの本棚の本」と「長姉の夫」であった「義兄の本棚の本など」であったという。具体的には、小学生の時点で、『令嬢会』や『婦人公論』などの雑誌、吉川英治の『宮本武蔵』、『太閤記』という歴史小説、さらに『赤と黒』『椿姫』『モンテクリスト伯』といった海外翻訳、また菊池寛『第二の接吻』、吉屋信子『地の果てまで』などの大人向け恋愛小説に至るまで、「強烈な印象をうけながらいつきに」読んだという。尋常小学校から進学した広島県立広島第一高等女学校時代の読書についても、「広島県女生になった私のいちばん好きだったこと、それは、やっぱり読書だった。相変わらず、乱読だった。クラスメートから、なんでも借りて読んだ。他クラスの人も、借りて読んだ」と振り返る。だが彼女は決して学業を疎かにはしていなかったようだ。自伝に登場する義兄、つまり長姉の佐伯文子の結婚相手は当時広島市庁に勤めていた濱井信三——戦後に広島市長となり、原爆ドームを永久保存すると決定した人物——だが、彼は一九三四（昭和九）年に結婚し、義父の願いで、新婚生活を文子の実家（つまり千賀子

の実家」と「庭続きに建てられた新居」で送っていたのだ。<sup>7</sup>濱井は「千賀子は義妹というよりも、実の妹のような気持である」と書いているが、彼によれば「あまり勉強していた様子にも見えなかったが、当時、難関だった名門の、広島第一高女にあつまりパスした」という。<sup>8</sup>高等女学校は五年制で、一二歳から一六歳までを過ごす学校である。濱井によれば、そのころの佐伯は「姿勢を正すためとか、礼儀作法を身につけさせるために、という義父の考えから、仕舞や、お茶、お花などのお稽古を素直に受け入れていた」<sup>9</sup>といい、当時クラスメートだった石田月子の随想によれば、「いかにも優等生らしい、ちょっと冷たい感じを人に与えるような印象」<sup>10</sup>であったという。佐伯自身も「冷たい感じといわれていた」と記している。当時の高等女学校は校則が非常に厳しかった。プライベートの外出時にも制服着用が原則であり、映画館、食堂、デパートには父兄同伴が原則であった。だからこそ佐伯は、「活字のなかに、ひろびろとした自由な、また未知な、また口マンティックな、また冒険にあふれた世界」を見出し、読書にのめり込んだのであった。しかし、「私は小説書きになろうと思ったことはな」かったとも書いている。とはいえ、言語表現には興味を持っていたようで、友人への手紙にたびたび短歌を添えていたらしい。一五歳で詠んだ「青嵐せいらんに追われて訪といし山寺の主の打つらし昼の碁の音」という一首が特に印象的であったと、石田の随想で紹介されている。そんな文学少女の彼女が一六歳のとき、すなわち高等女学校五年生の一九四一年に、「日本海軍のハワイ真珠湾攻撃にはじまる、対米英戦争がはじまった。女学校生活は、戦時色に塗り変えられていった。敵国語だといって、英語は正規授業からはずされて、補習科目となる日々が始まる。だが英語の好きだった彼女は、河野みつ先生という英語教師に頼み、個人教授を受けた。「私は、目的があつて英語を習ったわけではない」と述べる佐伯は、「上級学校への受験科目にも、英語はなかった。英語が好きだったことと、河野先生に私淑していたためである」と振り返る。河野先生は当時三五、六の独身教諭で、「低く太い声。男物のような黒ロイドめがね。ひつつめ髪。おしろいとか口紅などは、ひとはけもない顔。こんこんと流れ出る知性。私は、この先生に女性より男性的なものを感じ、その鮮明な個性にひかれたという。このことを佐伯は、「両親の死後は、女らしい温順な人生を歩むことのできなかつた私の個性が、

このあたりからすこしずつ頭をもたげはじめてきたように思う」と記している。

彼女は、翌一九四二（昭和一七）年に、一六歳で上京して日本女子大学家政学部に進学した。当時の日本女子大学は専門学校という扱いだった。なぜ国文学科でなく家政学部に進学したのかというと、「私のいとこたちが、多く日本女子大学の家政学部に進み、そのころにも、三人のいとこが家政学部に進学中だった。父は末っ子でもうわが家にひとりになった私を手放すのをいやがり、いとこといっしょの日本女子大の家政学部なら進学を許すが、ほかはすべてだめだった。わが家の君主の父に、だれも反抗することはできなかった」からだと打ち明ける。濱井信三は著書『原爆市長』の中で、「義父という人は、子供をめぐらさずかわいがった人であった」と記しているから、誇張が過ぎるというわけでもないだろう。似たように父親の反対によって、日本女子大学の英文学部でなく家政学部ならば、という条件で進学した者に平塚らいてうがいたが、佐伯にとつてはその境遇が苦難の始まりであった。「私の得意な学科は数学と英語で、不得手なものは裁縫、手芸、料理など」という彼女だったから「上級学校に進学したい気持ちだけで、日本女子大に入学した。でも、家政学部の講義に私はどうしてもついていけなかった。女子大生になった私は、クラスでピリの成績に転落し」てしまった。同じころ戦争が激しくなり、「寮生活で大豆カスいりや、麦ご飯を食べつづけているうちに、私は胃腸をこわしてやせこけていった。その時代には、私は本も読まなかった。体力も気力も失った姿で、講義を聞き、レポートは白紙状態であり、学校工場と呼ばれた作業場で、軍需の無線機のコイル巻きをやった」と回想する。体調を崩した彼女は、療養のためにいったん広島に帰省。そしてその年（一九四五年）の四月に再上京。同年八月、広島に原子爆弾が投下された。佐伯は、両親や親戚、ほとんどの故郷での友人を失った。「八月六日に、私の育った広島は消えた」と佐伯は記す。「私の生家は、広島市西大工町というところにあつて、いま原爆ドームの残る相生町から一キロちよつとしか離れてはいない。その家にいた両親は、原爆死した。もし私も広島に残っていたら、両親と同じ死の運命を受けていた」と振り返るが、この経験が佐伯の作家的原点であることは、間違いない。『文藝春秋』一九六七年八月号のエッセイで佐伯は「原爆投下の三月前に、私は上京して



いて助かった。十九歳であった。痘痕あばたのように焦土をあちこちに持った東京の街にいて、ふしぎに生き残った私は（中略）同時に、つぼみの命のままに散った友人達の死が、胸に迫ってたまらなかった」と振り返っている。「私が青春小説を書きはじめたのは、若い命のままに逝った友人たちを想う時、また、我が青春をふり返る時、明るい爽やかな物語を書いてみたかったから」だと続けて佐伯は語り、それをジュニア小説を書き始めたひとつの「初志」と表現している。同エッセイで、その初志をずっと貫き通せたと述べていないが、それでも「この分野にデンと坐りこんで、少女のための小説を書く作家がいてもよい」という想いを胸にして、雑誌での連載デビューから自伝執筆までの一四年間、少女小説ジャンルに「デンと坐りこみを続け、書き続けてきた」と作家人生を振り返る。一九六六年に創刊されたソフトカバー本「コバルト・ブックス」（集英社）において、佐伯の作品に共通して付された裏表紙「著者略歴」でも、「原爆のため両親、多くの親族を失い、ペンをとりはじめ少女少女のための小説を書き続ける」と紹介された。佐伯は戦後、友人や親族が、戦争・原爆死によって送ることができなかった青春を、少女小説として描いたのである。

前後するが、戦後、一九四六―九年までの佐伯については、東京で自活していたことしか判明していない。実家もなく、日本女子大学校はそのまま中退。佐伯の足取りが掴めるのは、一九五〇年に文芸同人誌『文藝首都』の会員となるころからである。書店で『文藝首都』を買った佐伯は、「私のようなたいして文学もわからないような者でも、受けいれてもらえそうな感じ」を受け、主宰者である保高德蔵宅に会員が集まって行う作品の批評会を訪ねた。自伝には「なになんでも文学をやるうと、気負いたったことはない」と書いているが、北杜夫によれば「彼女は、はじめ太宰治が『桜桃』などを書いた家にいた」ということであり、文学少女であった気質を褪せさせてはいなかったようだ。故郷から離れた東京の地でアルバイトをして自活する中で、佐伯はプロになりたいというよりも、まず「自分が浮き草のようにただよい流れている不安感」に苛まれ、「なにか、しっかりと踏んで歩く道がほしい」という気持ちから、『文藝首都』の会を訪れたのであろう。『文藝首都』は一九三三（昭和八）年一月に創刊され、一九七〇（昭和四五）年一月に終刊した文芸同人雑誌

である。主宰は一八八九（明治二二）年に生まれの保高德蔵で、一九二一（明治一〇）年七月に処女作「棄てられたお豊」を『早稲田文学』に発表し、正宗白鳥の賞賛を得たが関東大震災後の生活難により大阪の実家で石油販売を手伝ったが破産。その後再度上京して文学に打ち込み、一九二八（昭和三）年三月、自伝小説「泥濘」により第一回改造社懸賞小説第二等に当選し作家となった人物である。<sup>14</sup> 自分の不遇時代の体験を踏まえ、新人育成を主眼とした同人誌としてまず一九三二（昭和七）年季刊誌『文藝クオタリイ』を創刊。『クオタリイ』は二号で終刊したが、「文藝クオタリイ月報」として準備していた月刊誌『文藝首都』が三七年間続いた。『文藝クオタリイ』の創刊理念は、「極度に発達したジャーナリズムに支配された」「文壇のセクト主義」、つまり「既成文壇という垣」を越えなくては新人作家は作品を満足に発表できないため、「その突破戦術の下手な、或いは、そうしたことをこころよしとしない純粹で世渡り下手な若者たちは、不安と疲労と絶望にうちのめされ、脱落したり、自殺する者さえ出る始末だった。そうした有能な新人に相当枚数の舞台を与え、修行の場としよう」というものであった。<sup>15</sup> 戦後期には、同人誌とはいえ全国の書店で販売されており、一九五〇年代には北杜夫、佐藤愛子、広地秋子、田畑麦彦、天笠人誌、日沼倫太郎、なだいなだ等の若い文学志望者が集まった。北杜夫によれば「同人誌というより半分投稿誌の性質がありましたから、会費だけ払えば会員になれるというような感じがすね」とのこと<sup>16</sup>で、誰もが参加しやすい雑誌だったようだ。佐伯は飛び込んだ『文藝首都』で初めて小説を書き、投稿したが、誌面には掲載されなかった。当時の『文藝首都』には、会員になると投稿できる推薦作欄と、非会員でも投稿できる短編・掌編小説欄が存在した。確認できる佐伯の作品は、すべて推薦作講評の中に見ることができている。『文藝首都』一九五〇年四月号に「霧子の場合」が選外佳作（作者名と題名のみ掲載）、同誌一九五〇年六月号に「崩崖」が保高德蔵の「表現も知的なものがあり、描寫力もたしか」だが「多元描寫の形式をとっているために迫力が鈍っているのが惜しい」というコメントとともに作者名・題名が掲載。同年七月号には「ロマンの殻」が選外佳作（作者名と題名のみ掲載）、同年十一月号には同題作の添削をもとに改稿したと思われる「崩崖」が、再び保高の「作者の才筆は（中略）心理を惜しみなく表現している。が綺麗すぎて突

つこみ方が足りない」というコメントとともに作者名・題名が掲載。一月月号では未掲載の作品の中では最初に置かれており、推薦作の次席であったことが窺われる。こうした佐伯の、作家としての出発点の心情は、同誌一九五一年一月・一月合併号に佐伯千賀子名義で寄せた「美貌の文学」という随筆に吐露されている。「充実した思想と、いきいきした時代性をバックボーンとする作品の勁さといふことについて私自身痛感してゐた矢先」に「女流作家には思想がないと突発ねられた」彼女は、ある評論家が用いた「美貌の文学」という言葉こそが「女流作家に最も自然でふさわしいもの」であると考えた。ただしその文学は「所謂美辞麗句の並ぶを意味したものではなく、「愛情と繊細な心理克藤を、作品のモチーフ」とした「女性独特の眼が映し出すユニークな世界」だと書く。そうした「美貌の文学」への決意を、佐伯は次のように記している。

可弱く見えて決してそうでなく、きらりと光る文学になると思ふ。人々の胸に必ず根を持つしみるゝとした愛情に伝はつてゆくやうな作品。それは如何なる時代に於ても忘れられてよいものではない。めまぐるしい現代にては尚のこと、私は小粒であつてもそうした作品を物してみたい

この決意が失われた故郷への想いから発した青春小説への指向と結びついたとき、佐伯の少女小説が生まれるのだ。

『文藝百都』での活動は、佐伯千秋のその後の文筆業に直接は繋がらなかつたものの、佐藤愛子、田畑麦彦、天竺人誌、北杜夫らと知り合い、また当時東北大生で歳の近かつた北杜夫（一九二七年～二〇一一年）の「童話を書きなさい」という言葉は、その後の彼女の指針ともなる。このころ佐藤愛子とも知り合い、「才能に圧倒された」という。だが、「生き残つていた姉ふたりと戦地に行つて助かつていた兄の帰広のすすめを、ずっと断り、自活していた」彼女にとつて、会費や交際費のかかる同人活動は負担が大きかつた。生活苦となつた彼女は、しかし「帰広しても、私の個性はもう広島に定着し

ないと思ったからだ。きょうだいにぶらさがって暮らすのは、いやだった」ため、頑なに自活することを選択し、『文藝首都』からは去った。しかしそのころ、彼女の生活に転機が訪れる。広島にいる彼女の姉が、援助を受けようとする妹に、せめても仕事を紹介してくれたのである。それは一九四六年八月六日に創刊された教育雑誌『ぎんのすず』（広島図書（株）への文筆であった。「世界名作や日本名作を、子どもむきに書きなす仕事」であり、それが佐伯の生涯で初めての原稿料となった。「これは、文学といえるものではなかった。この時代、私はパンのために書いた」と彼女は記す。だが「私の性にあつた」のであり、文筆の仕事は少しづつ広がりを見せ、学習研究社からも仕事を得るようになる。現在国立国会図書館で確認できる「佐伯千秋」名義の最初の仕事は、学習研究社の雑誌『一年ブック』第三巻八号（一九五三年一月号）掲載の「きえないろうそく」（五二頁〜五九頁、松井末雄／絵）である。その後翌年にかけて、学研の学習雑誌、『4年の学習』、『5年の学習』、『6年の学習』へと、名作の翻案や短い童話を書いた。そのころ佐伯は、東京都三鷹町（現在の三鷹市）に住んでいた。当時三鷹町にはすでに新進作家であった瀬戸内晴美も住んでおり、偶然知り合いになった佐伯を「仕事をジャンジャンみつけてあげるわ」と小学館、講談社、実業之日本社の編集者に紹介した。これが一九五四年のことであり、初めて書いた短編三本が『少女の友』に掲載されることとなった。<sup>(18)</sup> その後にも『少女世界』『少女クラブ』にも原稿を持ち込み、みな採用されて十篇ほどが掲載されている。<sup>(19)</sup> 小学館でも浅野編集部長の判断で「絵物語 黒い船」（絵／沢田重隆）が『女学生の友』第五巻六号（一九五四年九月号）に掲載され、以後スターインタビューなどを担当しながら文筆修行に励んだ。やがて同誌編集長の桜田正樹の薦めで、第七巻六号（一九五六年九月号）に別冊付録文庫本として二五〇枚ほどの長編少女小説『光と風のおとめたち』を書下ろしで発表。佐伯は自伝で「この長編のあと、私はびっくりした。連日、郵便受けをいっばいにして、全国の少女からの手紙が来た。全国の少女たちにたいへん愛読されたことがわかった」と回想しており、その好評を受けて、桜田編集長は連載小説の執筆を佐伯に打診、『少女の友』誌上で『赤い十字路』連載が始まった。その後佐伯は、二〇年弱ものあいだ、ひと月も途切れることなく同誌に少女小説を連載し続けていくことに

なる。一九六〇年代後半からは、同じ小学館の『ジュニア文芸』に、一九七〇年代には小学館から分離独立した集英社の『小説ジュニア』に執筆し、初の単行本刊行は、集英社のソフトカバー・シリーズ「コバルト・ブックス」の創刊ラインナップ『潮風を待つ少女』（一九六五年九月）であった。彼女はその後、雑誌『小説ジュニア』が『Cotati』としてリニューアルする直前の一九八一年まで、現役で活躍した。その後は、児童文芸家協会の機関誌『児童文芸』などで、エッセイを寄稿するなどの活動に留まる。創設時より日本児童文芸家協会に所属。『児童文芸』第五巻二号（日本児童文芸家協会機関誌、二〇〇九年四月発行）によれば、二〇〇九（平成二一）年一月三日に亡くなっている（享年八三歳）。『女学生の友』一九五八年九月号に発表した「燃えよ黄の花」で、一九五九年に第八回小学館児童文化賞（文学部門）を受賞。また一九六八（昭和四三）年から一九八二（昭和五七）年まで、集英社主催の「小説ジュニア」青春小説新人賞（現「ノベル大賞」の前身）で全一五回の選考委員を一貫して務めた。<sup>22</sup>この新人賞からは、一九七〇年代後半以降の少女小説ジャンルを担っていった水室冴子や正本ノン、田中雅美、久美沙織など、当時の若手作家が輩出され、後世の少女小説ジャンルを支える書き手を発掘する場となった。また佐伯は一九五七年に、NHKテレビ連続放送劇「赤いくつ」の原作を担当し、同作は同年に水野英子によって漫画化された。<sup>23</sup>さらに著書『青い太陽』は、一九六八年四月から半年間、NETテレビ（現テレビ朝日）系列でドラマ化された。上記のドラマ主題歌として、一九六八年四月、作詞・佐伯千秋、作曲・菊池邦輔、歌・小林幸子でシングルのレコード「青い太陽」が発表されてくる（SAS-1095 COLUMBIA）（三三〇田）。これ以外の活躍として、佐伯は『少女クラブ』で一九五八年～五九ごろに連載していた水野英子の少女漫画作品「銀の花びら」の原作を、緑川圭子の名義で請け負っていた。<sup>24</sup>

### 三 銃後の少女としての「佐伯千賀子」

#### 1 『戦いの中の青春』に見られる銃後の少女

ここまででは佐伯千秋による自伝を基に、その文学的生涯に焦点を当ててきた。しかし、一九六八年の時点から振り返り、自らの人生を意味づけするという枠組みを持つ佐伯の自伝には、書かれていないこと、書かれていない思いが潜在する可能性はないのだろうか。例えば、戦時下の「優等生」であった佐伯が、どのような教育を受けた世代であったかを見落とすことはできない。これに関して、佐伯の母校である日本女子大学の四三回生が私家版として編纂した手記集『戦いの中の青春』（一九七五）を参考としたい。この本は、「はじめに」に「私共の世代は、小学校入学の頃に満州事変が勃発し、女学校入学と同時に支那事変が起こり、女子大入学の寸前に日米開戦となり、卒業の年に第二次世界大戦が終わりました」とある通り、佐伯と同じ一九四二年に日本女子大学校に入学した学生たちによって出版された文集なのだ。「はじめに」には、続けて次のように書かれている。

要するに、私達は物心がついた時、すでに戦争というものが全く無関係ではないものとして感じられ、成長とともに、ごく自然に戦争への協力者に導かれました。幼い手で慰問文を書き始め、女学校時代には慰問文、慰問袋の最もよき送り手となりました。そして夢をもって入学した女子大生活も二年余りで学業を放棄し、動員されて社会の一員として戦争に協力しました。戦争の責任者ではなく、協力者であった私共は、終戦を迎えて、それぞれ考えさせられました。だが、とにかく変動した社会にいきなり第一歩を踏み出して懸命に生きてきました。

物心ついたころ、満州事変から太平洋戦争に至る「アジア太平洋戦争」が始まった彼女たちは、いわば「軍国少女」だっ

たのだ。高等女学校二年生の一九三八（昭和一三）年に国家総動員法が発令され、大学校二年生の一九四三（昭和一八）年には学徒勤労動員が開始される。彼女たちも軍需工場や一般企業での勤労を余儀なくされた。当時、彼女たちより六歳年下だった高女生はその生活について、「しかし私は、銃後を守るんだ、と必勝を信じて少しもつらいとは思わなかった」と振り返っているが、戦争への「銃後」の協力活動は、当時の女性に比較的歓迎された。戦地の息子や夫、兄弟の帰りをただ待つことしかできない境遇にあったという以上に、その活動が女性の自己実現の機会として機能していたのである。加納実紀代によれば、「男は国外の〈前線〉に、女は〈銃後〉の国内に」という家父長制における性別役割分業が国家大に拡大される中で、戦場の実態が見えないこともあって「兵隊さんのため」に働く「銃後の女」は、一つの〈女性解放〉<sup>26</sup>だったのだ。『戦いの中の青春』には、佐伯のように体調を崩して一旦帰郷しても、再び東京に戻った者の手記がいくつも収録されている。なかでも、佐伯と同じ家政学部生だった倉田えれな「踏み続けたミシン」では、海軍衣糧廠に動員していたときの様子を「自分の手がけたこの衣類をそれらの人達が着るのだという、そんな銃後の乙女的意識が励みになったようです」と振り返る。自分たちの作る衣服が「戦う戦地の兵士につながる唯一の絆」だったとも書く。彼女は不調で一旦は故郷の新潟に帰された。しかし彼女は、「やがて、家族の反対を押しきって空襲の激しくなった東京の空の下に再び身を置くように」なる。「ただ、仲間が働いているのだ、あの人達と共に生きなければすまないという一念」だったという。女子学生にとっても、銃後の勤労動員は少なからず自己実現と繋がっていた。同じく銃後の少女であった佐伯千賀子が原爆死を免れたのは、何よりも彼女がこうした軍国少女だったからであり、積極的に戦争に協力しようと、広島から再び東京に戻ったためだったのだ。そのことの後悔が反映された作品として、「燃えよ黄の花」を見出すことができる。

## 2 「燃えよ黄の花」(一九五八)の意味

「燃えよ黄の花」は、はじめに小学館『女学生の友』第九卷六号(一九五八年九月号)に発表され、『若い樹たち』(集英社コバルト・ブックス、一九六六年二月)の表題作と併録された。その後は小学館『別冊ジュニア文芸』二号(春季、一九六八年四月)の「佐伯千秋特集」に再録。『若い樹たち』は集英社文庫コバルトシリーズの創刊ラインナップの一冊として、一九七六年に文庫化された。単行本版『若い樹たち』カバー折り返しの「作者のことば」には、「燃えよ黄の花」は、広島で原爆死した私のいとこがモデルです。戦後二十年、今の女学生たちは、戦争を知りません。戦いの中の青春を読み、平和の中の友情の喜びについて、もう一度、考えてみてほしいと思いました」とある。『女学生の友』掲載時に付された「この物語のはじめに」(書籍収録の際にも推敲され掲載)にも、「皆さんと同じ年ごろに、セーラー服のまま、若いつぼみの青春をとじた亡き友の墓前に、この物語を、ささやかな花束としてささげたいと思います」とある通り、「燃えよ黄の花」は一九四五年八月六日に原爆死したいとこ(自伝によれば「照子<sup>てるこ</sup>」)との思い出を基にした小説であり、故郷広島<sup>ひろしま</sup>の被爆した友人たちに捧げられている。言ってみれば少女/ジュニア小説家、佐伯千秋の創作の原点が結晶しており、彼女の創作原点を語る上ですこぶる重要な位置を占める作品である。さらに、わが国における「原爆児童文学」として、かなり早い時期に発表された作品でもある。しかし、一九九四年刊の『日本現代文学大事典 作品篇』(明治書院)では「ここに描かれた若者の一途な純愛と、死に至るその純愛の激しさは、ジュニア小説家である著者の好んで描く青春像の一つであるが、戦争告発のテーマがこの作品を異例なものにしている。当時としてはここまで直接的に広島・原爆に触れた児童読み物はまだ数少なく、昭和三十四年、著者はこの作品によって第八回小学館文学賞を受賞したが、大方の児童文学者からは顧みられることのないままに今日に至っている」(横川寿美子)とあり、小学館児童文化賞を受賞したにもかかわらず原爆を扱う「児童文学」としては評価されていない。また「少女小説」の文脈からも取り上げられることがほとんどない。『少女小



『説事典』(二〇一五)においても、作品項目が設けられていない。重要なのは当時「燃えよ黄の花」が優れた少女小説だから評価されたのではなく、少女小説なのに、児童文学的なテーマを扱ったというミスマッチぶりに評価の軸足が置かれていたことである。少女小説だから評価されるという二〇〇〇年代以降の「少女小説」研究の動向とは、異なるものとして理解されなければならない。現在の「少女小説研究」とは、これまで良心的・芸術的児童文学に対する「通俗的児童文学」として、いわば児童文学のサブジャンルとしてカテゴライズされてきた少女小説自体をひとつの文学ジャンルとみなし、これまで気づかれてこなかった価値を見出そうとする点に基軸が置かれている。だから児童文学として評価された少女小説という「燃えよ黄の花」は、編成されつつある「少女小説」ジャンル、あるいは「少女小説」研究においては評価の対象にされにくい。また、児童文学の功労賞を受賞した「燃えよ黄の花」だが、その受賞がちょうど現代児童文学の始まりとされる一九五九年であり、当時の選考委員が「近代童話」時代の作家とされる小川未明らであることから、現在の児童文学者の目から見て評価のできる受賞か否かは微妙な位置にある。<sup>(28)</sup> さらにいえば、ライトノベル研究の分野で、現在の少女小説Ⅱ女性向けライトノベルが一九七七年デビューの氷室冴子から続く系譜として扱われるなか、氷室以前の昭和少女小説は現在の価値観からすれば古臭いものであるという言説が形成されてきた。<sup>(29)</sup> つまり「燃えよ黄の花」は、児童文学としても、また少女小説としても評価することが難しい状況にある。だから同作の価値を再び問うためには、作家研究の一環として掘りあげるしかない。とはいっても『女学生の友』一九五八年九月号掲載の「燃えよ黄の花」(原稿用紙六〇枚程度)は、壺井栄「石臼の歌」『少女倶楽部』一九四五(昭和二〇)年八月九月合併号(原稿用紙一五枚程度)やいぬいとみこ「川とノリオ」『児童文学研究』第六号(一九五二年、原稿用紙一七枚程度)、今西祐行「原子雲のイニシアル」『朝日新聞ジュニア版』一九五八年八月七日付(原稿用紙三枚半)という最初期の原爆を扱った児童文学作品と比べても、時期の早さ、作品の長さ、作品の内容、いずれにおいても引けをとっていないどころか、それらに比べても、その存在意義はむしろ大きいともいえる。

しかし、「燃えよ黄の花」の評価の難しさは次のような点にも見出される。文芸評論家の川西政明は原爆文学には大きく分けて三つの流れがあると指摘する。第一の流れは、原爆投下時に広島・長崎にいわせられた文学者たちが書き残した作品（原民喜、太田洋子、峠三吉らの作）であり、第二の流れは、被爆者ではないが、作家として広島・長崎に出会い、そのとき生じた自らの内なる広島・長崎を主題にして作家が書いた作品（井伏鱒二、佐多稲子、いいだもも、井上光晴、福永武彦、高橋和巳、小田実、大江健三郎らの作）、第三の流れは、学生時代に被爆し、長じて作家になった世代が、被爆後遺症の不安にさらされながら、自己を凝視め、亡くなっていった友人たちや家族を鎮魂する作品（林京子、竹西寛子、渡辺広土らの作）である。<sup>31</sup>「燃えよ黄の花」は第三の流れに近いが、被爆したわけではないために第二の流れにも属す。原爆テーマの文学において、そのほとんどを分類できているこの川西の評価基準に、「燃えよ黄の花」は実はうまく当てはまらないのだ。では佐伯は、かつて戦後期にフランス文学者の桑原武夫が定義した通俗文学作家のように、自らの切実な「インタレスト」<sup>32</sup>によって物語を形成するのではなく、ただ多数読者の要求に応じて、既存の「固定化したインタレスト」<sup>33</sup>を形象化していくなかで原爆を扱ったに過ぎないのだろうか。いや、決してそうではない。佐伯自身は確かに被曝していないが、彼女には、軍国少女として自分の意思で銃後の勤労のため上京し、自分だけ、原爆死を免れた過去があった。つまり、軍国主義への加担という彼女自身の能動的な行為の結果として、彼女は家族や友人とともに死ぬことができなかつたのだ。そこには、自らの行為に対する後悔にも似た切実なインタレストが含まれている。自らの青春を銃後の勤労に捧げた彼女は、その行動が侵略戦争を支え、「兵隊さんのために」<sup>34</sup>頑張ることが軍国主義を育てたことを、その報復として落された原子爆弾による故郷の消滅によって、戦後の時点で痛感することになったのだ。「みっちゃん。なぜ、逃げなかつたんだっ」と「燃えよ黄の花」で主人公弘は叫ぶ。東京の陸軍予科士官学校から脱走して帰広し、黒焦げになって原爆死した幼馴染の三千代を掘り起こして自らの手で火葬した弘は、佐伯自身のできなかつた願望を反映しているのかもしれない。「なぜ、逃げなかつたんだっ」という叫びは、亡くなつたといこへの叫びであると同時に、勤労働員から逃げなかつた若き日の自分自身への

叫びでもあった。「燃えよ黄の花」は単に児童文学に目配せした少女小説ではなく、まぎれもなく佐伯千秋の自己表現から発した文学である。<sup>(34)</sup>

## 五、おわりに——残された課題

本稿ではまず、佐伯千秋の一九六〇年代までの人生をまとめ、次に戦争当時の状況を基に彼女の「燃えよ黄の花」に關して考察した。戦後期の少女小説ブームは、敗戦後の新作がなかなか望めない状況下で吉屋信子、川端康成などの旧作を新たな装丁の単行本として出版したことや、偕成社などの編集者が戦後期に防空壕やバラックを訪ねて戦前から書いていた作家を回り、新作原稿をかき集めて単行本を出版したことなどに端を発する。それら少女小説の単行本は、新刊書店に合わせて当時登場してきていたネオ貸本屋を通して流通したが、<sup>(35)</sup>新人作家の発表の場は単行本の形ではなかなか与えられなかった。こうした中で新人作家の受け皿として機能したのが当時の少女小説雑誌であった。それらの雑誌には、戦前から書いている作家はもちろん登用されたが、それに混じって無名新人の持ち込み原稿も掲載されていたのである。戦後期の少女小説を見る上で重要なのは、著者が戦前作家か、「少女小説戦後第一世代」なのか、という観点であろう。佐伯をはじめ三谷晴美（瀬戸内晴美）三木澄子、津村節子、川上宗薫、富島健夫らの一九四〇年代～五〇年代にデビューし、七〇年代ごろまで現役で書き続けた、いわば少女小説戦後第一世代ともいべき作家たちは、自らの青春を戦争に捧げたがゆえに、その作品にはその経験をいかにして少女小説として昇華するかという苦難が存在した。そうした個人的、内的な懊悩を、彼女／彼らが書き始めてから六〇年以上を経て、ようやく通俗的児童文学という枠を越えて見ることができるようになったとも言えるだろう。彼女／彼らをひとりの作家、ひとりの人間として見つめる視点をようやく私たちは持つことができるのかもしれない。そう考えれば、佐伯千秋と例えば第三の新人などを同世代の作家として読む視点を持つことさえ、

可能なのではないかとも感じる。「文学史の解体」が叫ばれる昨今ではあるが、解体することで鮮明に見えるものは確かに存在する。文学史の解体によって、これまで見向きもされなかった佐伯千秋のような少女小説戦後第一世代作家の実態・様相が今明らかにできるはずだ。今後の課題としたい。

## 注

- (1) ミシェル・フーコー『知の考古学』慎改康之訳、河出文庫、二〇一二年九月、九七頁。
- (2) 久米依子「少女小説」を編む——『少女小説事典』編纂の記録』『昭和文学研究』第七三集、昭和文学会、二〇一六年九月。
- (3) 『文藝首都』一九五一年三月号、裏表紙の「会員名簿」には「水島璃ぼう」名義で名簿の同人欄に記載されている。「徒刑囚」(「瀟亭璃昂」名義)が推薦作として掲載された同誌一九五〇年一二月号の六一頁に掲載された自己紹介に「水島行衛」(本名)とともに略歴が記されているため今日泊と判断できる。一九六二年に戦後日本SFの長編第一号となる『光の塔』を上梓し、一九五〇年代半ばにはSF界の最長老としてSF同人誌『宇宙塵』の創刊にも尽力した人物。
- (4) 峯島正行「新版について」『新版SFの先駆者今日泊亜蘭——』『韜晦して現さず』の生涯』青蛙房、二〇一七年一〇月には、「今日泊亜蘭には、SFファンの中には少数ながら、熱烈なファンがいる」とある。
- (5) 佐伯千秋「自伝 私の歩いてきた道」『別冊ジュニア文芸』2(春季)小学館、一九六八年四月発行。
- (6) 浜井信三「原爆市長復刻版」原爆市長復刻版刊行委員会、二〇一一年七月、三二七頁に「1934(昭和9)年10月佐伯文子と結婚(三男、三女を儲ける)」とある。
- (7) 浜井信三「義妹・佐伯千秋(千賀子)のこと」『別冊ジュニア文芸』2(春季)小学館、一九六八年四月。
- (8) 注7に同じ。
- (9) 注7に同じ。

- (10) 石田月子「クラスメートのひとりとして」『別冊ジュニア文芸』2（春季）小学館、一九六八年四月。
- (11) 浜井信三「原爆市長復刻版」原爆市長復刻版刊行委員会、二〇一一年七月、三五頁。
- (12) 溝部優実子「平塚らいてう——〈女性の中なる潜める天才〉に賭けて——」『青鞜』と日本女子大学校同窓生（年譜）日本女子大学大学院日本文学専攻岩淵（倉田）研究室編、二〇〇二年。
- (13) 北杜夫「佐伯さんの修業時代」『別冊ジュニア文芸』2（春季）小学館、一九六八年四月。
- (14) 日本近代文学館・小田切進編著『日本近代文学大事典』第三卷、講談社、一九七七年。
- (15) 保高みさ子『花実の森 小説「文藝首都」』立風書房、一九七一年。
- (16) 遠藤周作・北杜夫共著『狐狸庵VSマンボウ』講談社、一九七四年、八二頁。
- (17) 「年譜」『瀬戸内寂聴全集』第二〇卷、新潮社、二〇〇二年。
- (18) 佐伯千秋「わたしの履歴書」『別冊ジュニア文芸』2（春季）小学館、一九六八年四月。
- (19) 注18に同じ。
- (20) 佐伯千秋「作品年譜」『別冊ジュニア文芸』2（春季）一九二頁によれば執筆は一九五六年一月で、初稿でのタイトルは「光と影のおとめたち」であった。
- (21) その際の選考委員は、秋田雨雀、小川未明、尾崎士郎、西条八十、斎田喬、佐藤春夫、浜田広介、藤沢衛彦、室生犀星の九名。『文藝年鑑1960』（新潮社、一九六〇）では選考委員に坪田譲治が含まれているが、『教育技術』第一四卷第一二号（小学館、一九五九）に掲載の「第八回小学館児童文化賞の受賞者発表」では坪田譲治でなく尾崎士郎と記されている。ここでは賞を主催した小学館の情報を正確なものとして記載する。多くの単行本の著者紹介では「小学館文学賞」を受賞とされるが、正確には第八回「小学館児童文化賞（文学部門）」（現「小学館児童出版文化賞」）の受賞である。「小学館児童文化賞」がこの翌年の第九回（一九六〇年度）より「小学館文学賞」と「小学館絵画賞」に分かれ、一九九六年度（第四五回）に統合されて絵画部門が廃止され、現在は「小学館児童出版文化賞」となっているため表記の混乱が生じやすい。なお「第八回小学館児童文化賞の受賞者発表」によれば候補となっていたのは佐伯の他、平塚武二と岡本良雄の二名。
- (22) これ以外に『女学生の友』誌上で行われていた「ジュニア短篇小説新人賞」の選考委員もつとめた。

- (23) 原作は「佐伯千秋」名義。「少女クラブ」一九五七年一月月号付録冊子に収録。
- (24) 荒俣宏編著『日本まんが 第1巻「先駆者」たちの挑戦』東海大学出版部、二〇一五年一月、二二六頁。「緑川圭子」名義の漫画原作には、同じく「少女クラブ」掲載の松本あきら「月は見ていた」(読切、一九五八年六月号)、東浦美津夫「夕月の山びこ」(連載、一九六〇年〜一九六二年)、「黒姫さま」(連載、一九六二年)がある。
- (25) 「戦時中の女学生」『朝日新聞』一九八七年七月一七日朝刊、四面、テーマ談話室「戦争」内。
- (26) 加納実紀代「女たちの〈銃後〉」筑摩書房、一九八七年、五四〜七〇頁。
- (27) 堀尾幸平『日本児童文学概説』中部日本教育文化会、一九八二年。
- (28) 大橋崇行「児童文学のイデオロギー」『ライトノベルから見た少女／少年文学史——現代日本の物語文化を見直すために』笠間書院、二〇一四年。
- (29) 砂田弘「日本児童文学者協会の六〇年の歩み」『日本児童文学』第五二巻二号、日本児童文学者協会、二〇〇六年。
- (30) 久米依子『少女小説』の生成——ジェンダー・ポリテクスの世紀——青弓社、二〇一三年の「第3部 少女文化の変容／炭脈としての「少女小説」」では一九六〇年代の「ジュニア小説」から十代読者の関心を「すっかり奪ってしまった」(二一九頁)のは少女マンガであったと指摘されている。そして一九八〇年代の少女小説作家であった氷室冴子はその少女マンガ的表現を取り入れた作家として位置づけられている。
- (31) 川西政明「文学概観<sup>82</sup>」『芸芸年鑑』88『日本文藝家協会編著、新潮社、一九八三年』。
- (32) 桑原武夫『文学入門』岩波新書、一九五〇年。
- (33) 佐伯千秋の長編デビュー作である『光と風のおとめたち』(『女学生の友』一九五六年九月号付録)の七頁「光と風のおとめたち」をお読みくださる方たちへ——には、「私はあなた方の年ごろのとき、幸福とは、その人をとりまくものによって決められると考えていました。けれどもだんだん、幸福とは、その人の心の中から生まれるのだと、知るようになってきました。(中略) 皆さんも、この小説をお読みになったら、幸福ということについて、じっくり考えてみてください。そして心の中に幸福を育てていく少女になってください」とある。ここにも、戦時体制下における銃後の「幸福」に対する佐伯の後悔が読み取れ、さらにはそれが佐伯の少女小説創作における、大きな原動力ともなったことを読み取ることができる。

(34) 「燃えよ黄の花」掲載前号の『女学生の友』一九五八年八月号の三一六頁「作家画家のうわさ日記」に、「佐伯千秋先生が、先ごろ、ご結婚なさいました。ご主人は、法律専門。現在、裁判官や検事になるため、勉強中とのこと」とあり、「燃えよ黄の花」の執筆時期は、佐伯の結婚時期と重なっていることも付記しておきたい。また三木澄子「佐伯さんの人と作品」(『別冊ジュニア文芸』2 (春季) 小学館、一九六八年四月)によると一九五八年の夏ごろ、佐伯は「だいじそうに、命そのものようにだいじそうに、淡い色彩の単衣の胸に、原稿の包みをかかえて」おり、「いっしょうけんめい書いた作品なんです。もっと推敲しなければと思って、持ち歩いてるんです」と話したという。あとで三木はそれが「燃えよ黄の花」であったことを知った。佐伯の「燃えよ黄の花」への拘りがわかると同時に、同作の文章表現には編集者の手があまり加わらず、佐伯自身の表現が尊重されていることが窺える。

(35) 北川幸比古「小川正治氏が語るつくり手から見た少女小説今昔」『日本児童文学』第二七卷三号、日本児童文学者協会、一九八一年。

(36) 長谷川啓「敗戦後から一九六〇年代へ」『少女小説事典』東京堂出版、二〇一五年三月。

(博士前期課程一年)